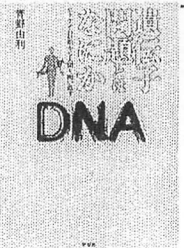


先月末、人間の遺伝全情報を解明する「ヒトゲノム計画」がほぼ終了した、というニュースが流れた。「アポロ計画と並ぶ一大プロジェクト」といわれるが、具体的なイメージに欠けるため、正直言って分かりにくい。

遺伝子研究の世界で、今、何が起きているのか。本書は、科学ジャーナリストの青野氏が、遺伝子解読に関する取材をまとめた「現場からの報告」である。

一九八〇年代半ば、ヒトゲノムの解明は「熟練者を一〇〇人はりつけても一二年かかる」とされるほど手間のかかる作業だった。これが「短縮」された背景には、「自動解析システム」の開発を含む、公的機関と民間企業の熾烈な「遺伝子解読競争」があった。



その中心的役割を演じた分子生物学者のクレイグ・ベンター氏の言う通り、「何千もの病気の新しい治療法」を見つけるのが計画のねらいだ。

青野由利著



しかしそこには、さまざまな「負の側面」も存在する。例えば精神症状を起すハンチントン病は、遺伝子診断でほぼ確実に発病を予測できるが、治療法の見つかっていない難病だ。診断するべきか、医師は逡巡する。

筋肉が委縮する筋ジストロフィーの場合には、胎児の「出生前診断」が行われた。「異常が分かったら中絶、というのがいや」という医師は、胎児にさえならない受精卵の「着床前診断」に行き着いた。青野氏は「歓迎すべきか、悲しむべきか、答えを出すのは荷が重すぎる」と嘆息する。

クローンやDNA鑑定、遺伝情報のプライバシーなど難問は山積する。何より日本人の「遺伝学リテラシー」（遺伝学に関する知識や理解力）不足を青野氏は指摘する。

生物学の丁寧な解説もあるので、本書を読み通せば、遺伝子技術の「現在」をつかむことができ。「生命科学の世紀」を前に、「遺伝学リテラシー」を高めるには格好の書である。（木）

●新耀社 2200円

遺伝子問題とはなにか